

校報 まきがね

恵那西中学校だより 第8号

令和2年11月2日(月)発行



自己を見つめ 可能性を広げる

～ 将棋棋士 羽生善治さんの生き様に学ぶ ～

校長 熊崎 健一

将棋の棋士といえば、近頃 藤井聡太さんが脚光を浴びていますが、我々世代だとやはり羽生善治さんを欠かすことはできません。小学1年生で初めて将棋と出会い、四段に昇進した中学生でプロデビュー。1996年には、将棋界初となる当時の全7タイトル(竜王・名人・王位・王座・棋王・王将・棋聖)を独占。その後も史上最年少・最速・最高率で通算1200勝を達成。2018年には棋士として初の国民栄誉賞を授与されるなど華々しいご経歴です。現在も第一線で活躍され、通算勝利数歴代1位の記録を更新し続けてみえます。そんな経歴を聞くだけで、羽生さんのお人柄や強さの秘訣、小・中学生時代のエピソードなどを知りたくなります。

最近、ある機関誌の特集でインタビュー記事を読みました。私は、これまでもっていた羽生さんへのイメージが随分と変わりました。その一部を紹介したいと思います。

「小1で友達に将棋を教わったのがきっかけ。でも、それは野球やトランプやラジコン同様、遊びの中の一つだった。」「中学生からプロを目指していたが、義務教育中なので学校生活との両立を心がけた。」「将棋は、はっきり勝負がつくことと簡単にコツが分からないところが面白かった。」「簡単じゃなくて、たまに少し前進できることが面白くて熱中していった。」「最初は全然勝てなかった。」「中学時代、遠征やイベントに出かける時は一人。自分で宿泊予約をしたり切符を買ったりするのもだんだん楽しくなってきた。」「対局中は、形勢がいい時も悪い時もある。不安や焦りもある。でも、いつでもベストを尽くしてチャンスを待つ。瞬間的なことに一喜一憂しない。」「その日のうちにミスの原因や負けの要因を分析する。全部完結させてぱっと切り替える。」「ある種のいい加減さも必要。負けを突き詰めて考えると自己否定になってしまう。」「将棋の戦術にもトレンドがあるので、自分自身も変化し対応している。」「将棋界だけの考え方や発想に縛られないよう、他の世界の人からも取り入れる。」「いいタイミングでいい人に出会い、切磋琢磨してくれるライバルがいることで自分が伸びる。」「PCで検索すればすぐに答えは分かるが、その前にまず間違ってもいいから自分の頭で考えること。」

心に残った言葉はまだありました。読み終えた私の感想は、「きっと幼い頃から才能に恵まれ、とんでもなく将棋が強くて将棋一筋の人生を送ってきた方だと思っていたが、意外とそうでもない。」というものでした。困難の中に楽しみを見出す(好奇心・忍耐力)、自分の成長に気づき喜べる(自己肯定感)、常に最善を尽くす(努力・平常心)、広く学ぶ姿勢がある(柔軟性)、何事もまず自分でやってみる(主体性・自立心)、人とのかかわりの中で自己実現をめざす(社会性・共生力)など、羽生さんから学ぶところは多いわけですが、これらは決して特別なことではなく、誰にとっても大切なことばかりです。また、経験を通して磨かれ、生涯の支えとなっていくものです。今まさに、西中生が日々育てているものです。目の前のことへの向き合い方を見つめ直すことが、将来の可能性を無限に広げていくことにつながるのです。

